

## 第2部：マヤの流れと魚と漁法



▲ねらいはメーターオーバーのビックタイムン  
左から内山・ピーター・河口の各氏



筆者  
井上 信夫

昭和24年山形県飯豊町に生まれる。  
新潟大学理学部卒業、県内の教壇に立つが、  
かたわら魚類調査や子供たちの野外体験の指  
導にあたる。二年前に転職して、これらを本  
業とする。昨年から世界少年冒険村のスタッ  
フに加わる。  
(連絡先) 自然案内舎 ネイチャーワーク  
新潟県中魚沼郡津南町芦ヶ崎甲1372-1  
TEL(0257)65-3622

ピーターのキャンプに降り立ち、  
夕食を済ませた私たち一行は、さ  
っそく釣りにかけた。

新潟を立ったのは七月二十六日  
の午後、翌日の夕方には、こうし  
てシベリアの雄大な自然の中にド  
ップリとひたつていようとは、  
夢の中の出来事のような錯覚を覚  
えながら無心に竿を振る。

### シベリアの夕暮れ

夕暮れ迫るマヤ川はこの上なく  
美しく、まさに幻想の世界だ。ポ  
ートのエンジンを切ると、物音一  
つ聞こえない。天を突く針葉樹が  
夕日の中で細く鋭いシルエットを  
刻み、清流は音もなく流れている。

さっそく四十〜五十cmのタイメ  
ンやシユエカ、レノックがヒット  
する。絵や写真でしか見たことが  
ない初対面の魚たちだ。リリース  
するのが惜しくなる。しかし、こ  
こシベリアでは、五十〜六十cmク  
ラスはほんの小魚である。

気がつくといつと二時を過ぎ、あた  
りとはとつぷりと暗くなっていた。  
河畔の舟着き場に上陸し、ダウリ  
アカラマツの林の小道をキャンプ  
に急ぐ。林に入ると、とたんに蚊  
の大隊が襲ってきた。手といわず

首といわず、所かまわずに食いつ  
いてくる。ほうほうの体でキャン  
プに帰還した。

ログのひさしの下でテーブルを  
囲み、ウオッカと日本から持参し  
たウイスキーを酌み交わす。夜遅  
くまで話は絶えない。飛行機の中  
から見た山火事、厳冬の狼、付  
近に住んでいる動物たちの話など、  
ガイド兼通訳のカルヤギンを介し  
て質問せぬ。スパコイナイ  
ノーチ(お休みなさい)は午前二  
時を過ぎてしまっていた。

トナカイの角やヒグマの毛皮を  
飾ったログに入ると、眠るのが惜  
しい。トナカイの敷革の上で一行  
が眠りについたのは、二時半過ぎ  
であった。外は満天の星空、北極  
星が見上げるような高さだった。

### マヤの流れ

レナ川はシベリアの三大河川の  
一つで、北極海に注ぐ流程四千二  
百七十kmの大河である。マヤは、  
レナ川の支川、アルダン川のその  
また支川に当たる。

私たちの釣りの舞台となったマ  
ヤ川は、レナの源流に当たるわけ  
であるが、それでも幅二百〜四百  
m、長岡市付近の信濃川と同規模



▲ラッキーボーイ暁か釣りあげたタイメン



▲タイメン(アムールイトウ・Hucho taimen)  
全長87cmあるが、タイメンとしてはまだ中型



▲レノック(コクチマス・Brachymystax lenok)  
大形固体は体の後半が赤褐色を帯びる

タイメンはサケ科の魚で、和名をアムールイトウという。北海道の釧路湿原などに生息するイトウとは別種で、規模の大きい早瀬状

## マヤ川の魚たち

タイメンはサケ科の魚で、和名をアムールイトウという。北海道の釧路湿原などに生息するイトウとは別種で、規模の大きい早瀬状

である。それでいて透明度は極めて高い。波立つ部分はごく少ないが、水深が深く、流れは相当に速い。所々で分流しては、再び合流する。よほど地形を知らない、迷ってしまいそうである。

水流が岸にぶつかるドロマイトの崖下の底質は、崩れ落ちてきた径数十cmの角礫である。その他の部分は数cmの円礫が多く、湾状になった所には砂泥がたまっている。流れの弱い場所には、エビモの類など水草が密生する。流れは極めて変化に富んでおり、生息する魚種も異なっている。水系全体では、四〜五mにもなるチョウザメをはじめとして、膨大な種類の魚が生息しているが、私たちが出会った魚は十三種類であった。

タイメンはサケ科の魚で、和名をアムールイトウという。北海道の釧路湿原などに生息するイトウとは別種で、規模の大きい早瀬状

タイメンはサケ科の魚で、和名をアムールイトウという。北海道の釧路湿原などに生息するイトウとは別種で、規模の大きい早瀬状

の部分に好んで住んでいる。時に一m五十 cmを超えることがある。六十 cmクラスまでは、かなりの数が上がったが、目指す一mオーバーのビッグタイメンにはなかなかお目にかかれない。

ピーターのボートから、ルアーを投げていた時だった。「うわっ、来た！」という息子の暁の声。ドラッグがきしみ、シーバスのルアー竿が一気に弓なりになる。ついに大形のタイメンがヒットしたのだ。内山さんの「竿を立てて、慎重に。」のアドバイス。大形魚は口が硬く、バレ易いという。やがて、大きな魚影が水面に浮いて来た。ボートを中洲に着け、浅瀬に引き上げる。渡辺さんと河口君の



タイメンはサケ科の魚で、和名をアムールイトウという。北海道の釧路湿原などに生息するイトウとは別種で、規模の大きい早瀬状

タイメンはサケ科の魚で、和名をアムールイトウという。北海道の釧路湿原などに生息するイトウとは別種で、規模の大きい早瀬状

ボートも着岸し、全員で見入る。全長八十七 cm、タイメンとしては中形の部類だが、日本の魚を見慣れている私たちにとっては、さすがにデカい。日本のイトウとは違って頭は平たく、背面の小黑点がない。完全な成魚で、背びれから尾にかけて、赤い婚姻色が見事に現れている。結局、私たちのレコードが、このタイメンとなった。

レノックはコクチマスという和名はあるものの、日本には生息しないサケ科の魚である。名前の通り、サケの仲間にしては口は小さく上唇が横に広がっている。腹側を除いて小黑斑が散在しており、六十 cmほどに成長する。タイメンと同様、流速の速い部分を好む。



▲オークニー(ヨーロッパパーチ・*Perca fluviatilis*)えらぶたに鋭い刺があり、指を切られる



▲シューカ(カワカマス・*Esox lucius*)大きな口の中に、たくさんの歯がある



▲コレゴナスの一種(*Coregonus sp.*)一見ニシンを思わせるサケ科魚類



▲ハリウス(カワヒメマス・*Thymallus sp.*)ルアーには食いつかず、毛針に来る



▲ヤチウグイ(*Phoxinus phoxinus*)三日月湖にたくさん住んでいる



▲ヒメハヤ(*Phoxinus phoxinus*) ユーラシア北部に広く分布するアブラハヤの一種



▲カワミンタイ(ハーボット・*Lota lota*)淡水性のタラの一種



▲フクドジョウ(*Noemacheilus barbatus*)急流に住むドジョウの仲間、腹側は平たい



▲カジカ(一種(*Cottus sp.*))流れの速い水底に住む

## ハリウス

和名カワヒメマスの仲間であるが、種名まではつきりしない。サケ科に似つかわしくなく、鱗が大きく、頭から尾に向かって縦に並び傾向がある。ルアーやスピナーには食いつかず、河口君が持参した小さな毛針で釣れた。日暮のころにさかんにライズしており、昆虫食と思われる。

## コレゴナスの一種

サケ科であるが、鱗が大きくなるのでニシンの仲間のようなものである。これもルアーには一切食いつかず、地引網にかかったものである。

## シューカ

和名はカワカマスと呼ばれるが、アムール川のものとは別種である。英名はノーザンパイクトと呼ばれる。カモグチという別名が示すように、口は大きく横に広がり、鋭い歯がある。最大1mを越す。

相当に臍猛な魚食魚で、時には水鳥のひなも襲うといわれている。水草が茂った静水域に多く、ルアーを見つけると猛然とダッシュしてきて食いつく。十数cmのミノ(小魚形のルアー)を、一喉の奥までスッポリ飲んでしまう。頭部には大きな感覚孔が開いており、水音にはかなり敏感なようだ。

## オークニー

ヨーロッパアンパーチと呼ばれる淡水産のスズキの一種で、三十四五cmほどになる。広くヨーロッパプレートに生息する魚で、アムール水系には分布しない。止水域を好み、群れをなして泳ぎ回っているらしく、十匹以上たて続けに釣り上げることができる。

黄色い体に黒いしま模様、赤いひれには食欲がわかないが、タイに似た白身は極めて淡泊で美味である。キャンブや川原では、丸ごと焼いて食べたが、日本から持参した醤油に実によく合った。是非刺身にして食べたい魚である。

## カワミンタイ

カワミンタイは日本名であるが、我が国には生息しないタラ科の淡水魚である。アムール川にも同種が分布する。最大1mを越すという。一見してナマズを思わせるものがあるが、下顎に一本のひげがあり、腹びれの先も糸状に伸びている。ルアーでは全く釣れず、刺し網や地引き網にかかった。

タラの仲間だけに、特に肝臓は旨いという。試食する機会を逸したのは、実に残念であった。

## ヒメハヤ

コイ科のアブラハヤの仲間である。流れの岸で、水流に逆らいながら群れている数cmの小魚である。

## ヤチウグイ

北海道にも生息しており、ヒメハヤとは同属ながら、流れのない止水域に住む。キャンブの目の前の三日月湖にも多数生息しており、十cm前後のものが、魚カゴや餌釣りでも獲れる。

## フクドジョウ

北海道にも住むドジョウの仲間、急流の石の下に潜んでいる。

## カジカの一種

石の下や、流れの速い岸辺近くで多数見ることができた。種名は不明である。

このほかに、三日月湖や入江には、現地の方がカラシンとよぶ体高の高いフナが住んでいる。また、同行の内山氏がシマドジョウを目撃しており、タイリクシマドジョウと思われる。

## シベリアの漁法と燻製作り

シベリアに住む人々は、魚や獣草木・樹木などの天然資源を上手に利用して生活している。豊富な川魚は、人々の食糧になり、犬の



▲地引き網の獲物を川原で処理する  
淡水魚マニアならよだれが出そうな各種の魚



▲刺し網を上げるピーターのスタッフ  
糸は太いがシベリアの魚はかかる



燻製小屋の内部  
▶レノック・シュ  
ーカ・オークニ  
ーなどが吊され  
ている



▲刺し網の獲物  
魚に混じってキンクロハジロの幼鳥がかかった(右下)

餌にもなる。私たちが訪れたマヤ川付近では、漁法はいたって限られている。全て自家消費で、必要なだけを漁獲しているという。現地の漁法を二通り見せてもらった。一つはシューカ網といい、網目5cm四方、長さ約10m、高さ八十cmほどの刺し網である。ウキは、シラカバの皮に熱湯をかけてチクワのように丸めたものだ。大量の樹脂を含むため、長く水につけても腐らない。糸はタコ糸ほどの太さで、日本の魚だったら警戒心が強いから、目の前でUターンしそうである。日本製のモノフィラメントの網を持ち込んだら、処理に困るほど獲れる事だろう。

もう一つは、長さ三十五m、高さ1m、網目3cm四方の地引き網である。川原の浅瀬にいる一人が一端をロープで支える。網をボートに載せて沖合いに進みながら広げ、下流に流れ下りながら、舟べりを叩いて深みの魚を浅瀬に追い出す。四十mほど進んだところで岸に向かって網を絞り、川原に引き上げる。夜間に行われる漁法で、オークニーやシューカ・タイムン・

コレゴナス類・カワミンタイなどが大量に獲れる。

私たちから見ると、もっと効率の良い漁法はいくらでもある。しかし、必要なものを必要なだけ利用するのが、資源を枯渇させない狩猟採集民の知恵であり、「地球にやさしい」生き方なのだ。

漁獲物は、その場で腹を裂き、キャンブに持ち帰り、煮て犬の餌にしたり、燻製にする。

燻製法も大胆かつ素朴である。まず、水洗いした魚に塩をしながら容器の中に積み重ね、間に香りがけにスグリの葉を挟んでいく。

スグりは、キャンブの回りにいくらかでも自生している。翌日、調理場を兼ねた燻製小屋の天井につるし、下からいぶす。燻材は、朽ちかけたシラカバである。湿度が低いから、こうして四〜五日もすると、見事な燻製ができあがる。

グルメブームとか称して、外国まで出かけて食材をかき集めるのではなく、身近な資源を大切に利用して生きる・・・そんな生活の知恵は、我が日本でも最近まで生きていたのだが・・・。